

## 新島賞『涙に込められた「愛されたい」という思い』大本 桂菜

現代社会において、確かな「愛」は存在するのだろうか。この世に生をうけた限り、子どもたちは溢れんばかりの愛の中で、心の安定を保ち、健やかに成長を遂げるといった、いわば当然の願いは等しく叶えられるべきものである。しかし、世の片隅に愛の存在を知らないまま取り残されている子どもがいる。

かつて新島襄はこんな言葉をのこしている。「一人を得、一人と問答し、一人の心を聞く」新島襄は当時、国禁を犯して脱国し、アメリカに渡り、これからの新しい世を自身の目に焼き付けた。そして近代国家を創り出した「人」に強く関心を持ち、帰国後、日本の近代化のリーダーとなる人物の育成を目指して同志社英学校を設立したとされている。そんな志を持った新島襄が語るこの言葉は、彼が個を重んじ、そして個を愛した証ではないだろうか。私はこの言葉を、自身が課題として掲げ取り組んでいる、児童養護施設における愛着障害を抱える子どもたちへの支援に重ね合わせる。

私は児童養護施設で暮らす子どもたちとの触れ合いを通して愛着障害を緩和する取り組みを行っている。児童養護施設で生活している大半の子どもたちは、愛着障害を抱えている。そんな子どもたちを「個」として、一人の「人」として大切に向き合い、そして「愛」することがこの子たちの未来を創ることに繋がると私は信じている。

その活動の中で私は幼い一人の女の子に出会った。その女の子は、児童養護施設に入所してから一度も涙を流したことがなかった。子どもが流す涙の意味を考えてみたとき、自分の気持ちや欲求の表現であるとともに、人が最初に流す涙は、親との繋がりを求める大切なメッセージであるといったように、涙の意味の重要性に気が付く。そして、その涙があるからこそ人は、養育者との愛着を形成することができ、安心して人は自分の存在を確かなものにすることができる。しかし、この女の子のように、児童養護施設で育てられた子どもたちには、母親など特定の養育者がいない。そのため、泣いたときに繰り返し子どもに駆け寄ることは難しい。幼い子は泣くことが仕事といった言葉をよく耳にするが、この女の子は泣くことすらできずにいた。このままでは、養育者との間に愛着が形成されないまま、この女の子は大人になってしまう。私は意を決して、他の子が泣くなか、部屋の片隅に一人ぼっちでいた女の子を呼んで、女の子の身体を包み込むように抱きしめた。すると、堰を切ったように女の子は大きな声でわんわんと泣きじゃくったのである。このときの女の子の涙を私は忘れることができない。そして私は、この女の子は自分自身が必要とされていない存在と感じ、泣くことを諦めてしまっていたのだと感じた。こんなにも幼い女の子が、もう泣くことを諦めてしまっている現実。自分の存在の意味を確かめられないまま年月だけが過ぎていく現実。そんな現実を目の当たりにしたとき、私はこの現実を私の手で変えていきたいと強く思う。今の私は、ただ女の子を抱きしめてあげることしかできない。でもそれが私の原点であることに変わりない。だからこそ、私は大学で専門的に福祉学を学び、児童福祉の分野を専攻したい。そして子どもたちが愛着障害となる要因分析をおこない、必要な支援策を研究していきたいと思う。そして将来は一人ひとりの子どもたちに寄り添い、愛情に飢えている子どもたちの愛着形成を促す支援をおこなう団体を設立して活動したい。

安心して子どもたちが涙を流せる社会の実現。そんな社会の実現を志す私の胸には、紛れもなく、私が出会った女の子の涙の意味が深く刻まれている。